

## 小柳先生との思い出

土屋 結城

私が小柳先生と初めてお会いしたのは、津田塾大学言語文化研究所の「イギリス近現代文学のテキストとコンテキストに関する研究会」でした。後で知ったことですが、そのとき先生は国内研修中で、津田塾大学言語文化研究所に所属されており、熱心に研究会に参加されていました。

その後、英文学科の助教として奉職することになり、当時主任だった小柳先生とは密に仕事をする事となりました。渋谷に移転してきた今、つい2年前まで毎日当たり前の光景として見ていた日野の英文学科助手室でさえ懐かしく思われますが、その助手室の一角に席があった私は日々英文学科の先生方と顔を合わせていました。小柳先生は私にとっては大学の先輩でもありますし、ともに北海道出身という共通点もあり、慣れない業務について頼ってばかりいましたが、その都度、優しく、かつ少々のユーモアを交えてアドバイスを下さったものでした。ある年のオープンキャンパスの後には、当時の助手さんたちとともにご自宅に招いて下さったこともあり、丹精込めて育てられたバラを直に拝見し、その後は先生がよく行かれるお店で選んで下さったワインとともに美味しい料理に舌鼓を打ちました。

私が近くで小柳先生の姿を拝見していて驚いた点は、そのように主任業務が忙しい中でも、毎年『実践英文学』に論文を投稿されていたことです。仕事をする一方で、新しいテーマを見つけ、毎年着実に論文を発表するのがどれほど大変かを痛感し始めていた折でしたので、近くに小柳先生のようなロール・モデルがいらっしゃるのはとても励みになりました。

その後、私が専任講師として採用され、自分自身の研究室を持つようになってからは少しお話をする機会が減りましたが、授業の打合せなどをするとときにはやはりいつものようにお話を聞かせて下さり、楽しいひとときを過ごしたものでした。

定年を前にしてのご退職に残念な気持ちでいっぱいですが、これからはご家族とのお時間を大切にしつつも、むしろより一層研究に励まれるのだらうと思うと、今後の先生の研究成果が楽しみでもあります。最後になりましたが、小柳先生のより一層のご活躍をお祈り申し上げます。